宝の海から

白浜で出会った生きものたち

⑥⓪

京都大学助教授　久保田　信（京都大学瀬戸臨海実験所）

年末タイでフィールド調査

あわや惨事の目撃者

12月20日から1週間、タイ国バンコクのチュラロンコン大学とプラパ大学を訪れ、刺胞動物門ヒドロ虫類の系統分類学について共同研究調査などを行った。広島大学の豊潮丸でお世話になっている大塚攻助教授チームの寄生虫類の研究調査に同行させていただいた。

チュラロンコン大学では、ヒドロクラゲのいくつかのサンプルを調べたところ、日本にまったく生息しない種類のほか、汎世界的な終生プランクトン種も多かった。昨年6月に開催された国際サンゴ学会で報告した日本初記録種が、バンコク付近の川の中流部から、日本で報告例のない種と一緒に採集された。異なる生息域に通常は住みわけている種であっても大きな川では共存が可能なのだろう。

プラパ大学には水族館や博物館があり、連日、大勢の小中学生や一般団体などが押し寄せていた。両施設を案内して頂いたが、田辺湾で見かける熱帯系の動物が数多く飼育展示されていて親しみを覚えた。

例えば、クマドリなどのモンガラカワハギ類やオニヒトデなどこれまでの連載でとりあげたものが次々と現れる。分類学研究室で無脊椎（せきつい）動物を専門にしているトンさん、カワさん、ティクさん、スチャさんら、そして底生動物学が専門で理学部長のカシンさんにお世話になった。

あちらこちらのフィールドを案内して頂き、自然養殖で市場に出回っているミドリイガイやカキの1種をはじめとして、ハイガイ、タイワンハマグリなどの二枚貝類を購入した。1個体ずつ開いてカイヤドリヒドラ類の共生状況を調べた。シャム湾は塩分濃度が低く、水深の浅い場所なので、カイヤドリヒドラ類の生息に適しているとの期待していた。

しかし、どの二枚貝を開けてもさっぱり共生がみられなかった。これとは対照的に寄生性のケンミジンコ類やへん形動物の渦虫類は高頻度の共生がみられた。

タイ国プラパ大学水族館で模型的に展示したミドリイガイの養殖

タイ国プラパ大学水族館で飼育展示中のクマドリ

タイ国プラパ大学水族館入り口で概要を説明中のトンさん

25日には、プラパ大学から南へ乗用車で1時間ほどのところにある一大リゾート地パタヤへ行った。海岸では多く外国人がバカンスを楽しんでいた。数キロ沖合に浮かぶ小さな無人島へモーターボートで行って、スキンダイビングでの調査を半日した。クシクラゲ類の2種に遭遇できたが、1種はカブトクラゲで、日本をはじめ、世界に広く分布する種だ。もう1種は赤い玉状のもを10個ほどそで状突起に縦列させていた。分類形質を詳しく調べなければ分からないが、おそらく日本以外では初記録となるアカホシカブトクラゲと思われる。

プラパ大学は広々とした敷地で整備された構内は居心地がよい。宿所も14階の最上で眺めもよく波静かなシャム湾が毎日眺められた。熱帯系の植物や鳥、は虫類などとともに深く印象に残った。

大学と道路を一つ隔ててたところに、毎晩たくさんの屋台が真夜中まで立ち並ぶ。そこでの食事は、激辛かと思えばかなり甘い味つけもあった。ヌードルがさまざまでシーフードがふんだんに食べられる。エビ類の養殖も盛んなので、たっぷりエビが入っているのだ。めん類だけでなく、焼き飯にも。また、生まれて初めて虫の油いためも食べたが結構香ばしくおいしかった。

市場にはかずかずの魚介類がみられたが、日本では天然記念物になっているカブトガニ類が多数水揚げされていた。カブトガニ3種のうち2種の生殖巣が食べられるとのことだが、料理法が難しく、あたることも多いため味見はしなかった。

12月は乾期なので日によっては肌寒い朝もあり、心配していたカも少なく過ごしやすかった。ホスト研究者たちと、カラオケやタイ式マッサージなどでリラックスと親ぼくもはかれていい思い出となった。ここでもカラオケチャンピオンがまかり通った。

タイのプラパ大学付近の市場にはさまざまな魚介類が見られる

温かく親切な人柄であるタイ国研究者にすっかりお世話になった。ほとんどこれまで研究例のないヒドロ虫類なので、今後、生活史解明を含んだ地道な基礎研究を主軸とした系統分類学が育ってくれればとの願いをこめて、今後もより一層共同研究を発展させていく予定である。

帰国寸前だったが、マグニチュード（M）9の巨大地震による津波でタイ南西部のプーケットをはじめインド洋の沿岸一帯に甚大な被害が出たとのニュースが流れた。幸運にも今回の研究はマレー半島にはばまれたシャム湾の北東部だったので津波が回り込んでこなかった。だが、旅行前は知人のいるプーケットに出かけることも考えていたので、恐怖で身を震わした。もしかすると自分自身が漂着物になっていたかもしれないのだ。

12カ国で犠牲者が出ており、1月中旬になって、死者は16万人を超え、常夏の青い空と海がうそのようである。東南海・南海大地震による津波被害が懸念されている紀伊半島沿岸では、警戒を緩めてはいけないと改めて思った出来事だった。